

終助詞「ぜ」、江戸・上方のそれについて

前田 勇

例えは「さあ、行こう」といっただけでは方延性は弱いが、これに終助詞を付けて「さあ、行こうぜ」というと、たちまち東京弁となる。終助詞「ぜ」は、東京弁の特徴形の一つだといつてよからう。

しかし京都弁・大阪弁にも、これがある。ただ東京形「ぜ」がまれで、一般にはその訛形「で」の方が優勢なために、他郷の人が気づかないだけである。地元の人では勿論自ら気づいていて、例えは猪飼九兵衛氏の『方言と大阪』（昭和二十三年孔版）ことば癖の条に、

「ぜ」 下級な命令形

座つてるのんやぜ・見たらいかんぜ・嘆べたらいかんぜ

とある。「ぜ」そのものが下級な命令形かどうか、それとも脇に列挙した文例がそうかどうか、必ずしも明確でないが、同書巻末の「結びに代へて」は、大阪弁——特に船場言葉の実態を示すために書かれた小説風な会話であり、その中に船場は備後町の若旦那が、南地のお茶屋の女将にむかつて、

「いやまだそないでもないぜ、昼は忙しいけど、今出がけにはもう仕舞ふてたぜ。」

と言っているから、「ぜ」そのものが下級な命令詞であるという

のなら、つじつまが合わないことになる。それにまた、「ぜ」は挙げて置きながら、「で」に触れないというのも、現前の事実には忠実であるとはいえない。その点は、牧村史陽氏の『大阪方言事典』（昭和三十年刊）の方が、実態を写している。同書「ぜ」の項と「デエ」の項とを引用すると、

ゼ（接尾）……よ。下品な命令語。ぞえの転訛であるが、大阪ではさらに転訛して、でと発音する。

例——するんやぜ。そんなことしたらあかんぜ。（駄目だよ）

デエ（接尾）……さうやデ。いややデのデであり今行くデ。これ大きいデのデである。つまりさうだよ。いやですヨ。今行くヨのヨに当る。元来は、ぞ。ぞえからの転訛であつて、ゾエ↓ゼ↓デと変わったもの。（中略）

一荷堂半水の『人情穴さがし心の内外』三編に後家「なんの、清七との因縁もあるさかい、お前も呑んだがえいぢやないか」下女「知りませんでエ」

引用のついでに、この解説に批正を加えて置こう。先ず現行の「で」の遡源考は本稿でも試みるから後に回すとして、「ぜ」な

雑穀八	桂 円 枝			演 題	演 者
	生 貝	胴乱幸助	鼻捻ぢ 誉田屋		
3	6	0	0	2	ぜ
3	1	7	4	0	で
〃	〃	〃	〃	〃	備考 京都弁 大阪弁

り「デエ」なりを接尾語(?)と見るのは誤解である。それよりも見出し語に「デエ」を掲げたのは、更に大きな誤解である。一荷堂半水に典拠を求めているが、この「でエ」は、筆者が大阪芸芸大学『学大國文』第二号に取上げた「幕末の大阪弁に現われた女性専用の終助詞でえ」に外ならない。解説中の文例がすべて「デ」であるように、見出しも「デ」と改めなくてはならない。また、この著者も『方言と大阪』の著者と同様、「ぜ」を下品な命令語といっている。下品か否かとはかく、命令語でないことだけは明白である。

さて上述のように京阪の「ぜ」は、今日では「で」に圧倒されて廃滅にひんしているのだが、「ぜ」が「で」に転訛した時期は、さほど古いとは思えない。というのは、一体、上方落語は東京落語に比べると保守的で、その言語に古色を存するが、試みにその落語について、この「ぜ」「で」の頻出度数を観察してみると、次のごとくである。

※昭和四〇五年刊『名作落語全集』十二巻に所収の上方落語中、「ぜ」「で」を使用したものすべてを表示する。

計	桂 三木 助	立花家千橋	露の五郎	桂 さこば	桂 小春団治	桂 文治郎	笑福亭枝鶴	桂 春団治	林家染丸
	箆屋娘	浮かれの屑選り お文さん	稽古屋 昆布巻芝居	千両蜜柑 仏師屋盗人	円タク(新作) 宇治の柴舟 禁酒運動(新作)	崇禪寺馬場 蓮の誠 理屈按摩	居候講釈 猿後家 吉野の花山	八問答 盗人の仲裁	応挙の幽霊 住吉鴛 親子酒
83	0	5 8	7 3	8 3	1 5 1	0 4 0	6 2 2	1 3 0	0 9 4
91	5	0 11	0 1	0 5	0 5 2	3 6 5	8 2 0	3 0 13	1 2 4
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

これは実演そのものではないが、きわめてそれに近いものであるから、実勢を知るべき資料としてよい。時期は、大正・昭和の交である。すなわち当時、上方落語に現われる「ぜ」「で」は、その勢力、ほとんど伯仲する（認定如何で「で」の数は右表より多くはなっても少くなることはない）というべきだが、前述の通り上方落語の言語は古色を存するから、当時の一般市民の言語では、「で」の方が優勢であったと推察しなくてはならない。さて明治まで遡るとどうなるか。例えば明治三十九年刊『三五派高座の色取』（曾呂利新左衛門口演）など、全部「ぜ」であって、「で」は一例もない。これもまた古色を存すると仮定して、「で」の発生はせいぜい明治期であつたらうと推測される。

※因みに明治三十六年刊『大阪のをさな言葉』（大阪市保育会編）同三十九年刊『言葉のよしあし』（東区教育協会編）は、幼童語のみを集めたのではなく、成人の方言訛語をも含むのであるが、これには「で」は勿論「ぜ」も採録してない。

明治以前に遡れば、今日まで管見に入った限りはすべて「ぜ」であつて、「で」は一例もない。しかし、上方の「ぜ」は、遡っても寛政どまりのようである。

- ・よふきひてゐるぜ。（仲居↓客）
- ・旦那モンきらひじやといふてござり升ぜ。（仲居↓客）
- ・ひとつやり升ぜ。（花車↓客）
- ・よひせなア（幫間↓芸子）
- ・きんこいやじやぜ。（女郎↓芸子）

—以上、寛政六年大阪板・粋のすじ書—

ところでこうした上方の「ぜ」と、東京（江戸）の「ぜ」との関係は如何。両者の異同については後述するが、両者は全く同一語と認められる。そして東京（江戸）の「ぜ」は、遡れば安永にまで至る。すなわち江戸が早い。この時期的ずれは、上方の「ぜ」が元来江戸から移入したものではないかということ、われわれに思わせる。この思いを更に強めるのは、上方の寛政期は江戸語の西漸期だったという事実である。例えば寛政六年刊『虚実柳巷方言』を見ると、「いやみ」な物事を列挙した中に、「十日程いて江戸詞遣ふ」とあつたり、また「近年大阪にて通言をはくこと流行」として九語ほど実例が挙げられているが、みな江戸語である。そればかりか西とも東ともいわずただ「粹言」として例示したもののの中にさえ、江戸語がまじっている。これは大阪の様子であるが、京都も同じことで、寛政十年刊『青楼阿蘭陀鏡』に、「兎角当世は、江戸風俗言葉さへまぬれば、大通とか粹とやらんに心得」とある。

上方の「ぜ」が、元来、江戸語の移入だと仮定して、ここに一つ気になるのは、

是から又どなたそのお仕込でどのやうによふなりじやもしれませんぜ。エナア（花車↓客）—寛政十二年刊・南遊記。三—とある。「ぜエ」である。今までのところ気の付いた例の中ではこれが初見であるが、こういう語形も当時行なわれていたものではない訳には行かない。

そこで江戸の「ぜ」を洗ってみる必要がある。江戸の「ぜ」は

前述の通り安永頃から現われ始めて、連綿今日に及んでいるのだが、その「ぜ」は、従来、「ぞ」の転だと説かれている。果してそうならば「ぜえ」は「ぜ」の長呼〔なを「なあ」というの類〕でありうるか。湯沢幸吉郎博士によれば、

「ぜ」は「ぜえ」ともなる。感動の意味を表わす語であって、「ぞ」に似ている。活用語の終止形に附いて文の終りに用いる。打解けた間柄に用いる語であって、目上の者との談話に現われることはない。—昭和二十九年刊・江戸言葉の研究・第二章助詞第一四項「ぜ」—

「ぜ」は「ぜえ」ともなるというのだから、「ぜ」の長呼が「ぜえ」という意味にも取れるが、はっきりしない。しかし果して「ぜ」の長呼が「ぜえ」であろうか。今、江戸資料〔ただし酒落本・滑稽本・人情本〕を閲覧すると、それは自ら次の四類となる。

- (1) 「ぜえ」〔ぜへ「ぜえ」など〕のみを用いたもの。
- (2) 「ぜえ」「ぜ」を併用したもの。
- (3) 「ぜ」のみを用いたもの。
- (4) 「ざえ」〔ざへ「ざえ」など〕のみを用いたもの。

もしも「ぜえ」が「ぜ」の長呼——それは恐らく強調形——であるならば、(1) (例えば安永四年刊・甲辰新話) をどう説明するか。用例のすべてが強調形で、通常形は一例もないというのはおかしい。また、もしも「ぜ」が「ぞ」の転であるならば、(1) は勿論、(4) (例えば天明四年刊・浮世うきよの四時) をどう説明すべきか。何よりかより、そのような音訛は考えられない。江戸資料においては、(2) に属するものが安永・天明期はもとより文政・天保期に

及んでも、なお絶えていない。結局、「ぞ」の転という説も「ぜ」は「ぜえ」ともなるという説も、われわれの疑問を解いてはくれない。(1)も(4)も、(2)も(3)も、「ぜ」の系譜を次のように書くとき、始めて疑義釈然となるのではないか。



すなわち「ぜ」の原形は「ぞえ」であり、その音訛は $\text{ぞ} \parallel \text{ぜ}$ である途中の一表記〔一つの变体表記〕に外ならなかったろう。音訛の上から見てそうとしか考えられないだけでなく、用法を比較しても、「ぜ」系列は必ず面前の話相手にむかって話しかける時に用いられる。これに対して「ぞ」はそれより用域が広く、自ら独りごつ時にも用いられる。自ら独りごつて例えば「これは、妙だぜ」ということもないではないが、それでもやはり、「これは、妙だぞ」というのと同じではないのであって、あたかも面前に話相手がいるかのごとき心的ポーズの言葉であるというだけのことである。「ぜ」系列に、本質的にこうした話しかけの姿態があるのは、それ自身に内在する「え」の要素の然らしめる所であろう。近世の終助詞「え」、あるいは現京都弁の終助詞「え」のいかなるものであるかを知る者ならば、直に納得の行くことであろう。

所詮、江戸においては「ぜえ」と「ぜ」の二段構えであったと考えるべきである。そしてそれが西漸したのだとすれば、さきに

大阪板『南遊記』の「ゼエ」に付けた不審紙は、安心して取去ることができらう。とはいえ、「ゼエ」と「ゼ」の間にどれだけの落差があったのかは、用例を帰納的に見通しても、必ずしも明確には捉えがたい。しかし、「ゼエ」の初発期に原形「ぞえ」も併存しその両者間に丁寧度の軽重らしきものの感じられる所からすれば、「ぞえ」から「ゼエ」、「ゼエ」から「ゼ」へと、形態のくずれに比例して丁寧度が軽くなったものかと想定される。これは現在京阪における「ゼ」対「で」の実態を思い合わせても、うなずける。「ゼ」も「で」も、既述のように京阪地元の人からは下級とか下品とかいわれているが、そうした感想は、特に「で」の方によく当たる。要するに時期を同じうして用いられた「ぞえ」「ゼエ」「ゼ」は、待遇感情のランキングに應じる形と考えてよさそうである。そういう中にも「ぞえ」は、「ゼ」が時々と共に優勢さを加えるにつれて、丁寧さというよりも古めかしさへと変色して行ったもののように観察される。

それではこの「ゼ」系列は、どのような意味を表わしたか。いろいろな場合がある。

- ① 自分の言うことを、相手に告知知らせる気持を表わす。
- ② 教えさすとす、または、たしなめる気持を表わす。
- ③ うながす、または、勧める気持を表わす。
- ④ 相手の注意を喚起する気持を表わす。
- ⑤ 念を押す気持を表わす。

これに尽きるのではない。しかし全部挙げ尽くしたとしても①以外はすべて自分の言うこと——終助詞を取去った文の内容——

の反映であり余響であって、本質的・恒常的属性ではないと考えられる。根本義は、①にあると思う。従来、語の末に添えてその語の意を強める、というような説明が行なわれているようだが、異議を申し立てないではいられない。再言すれば、自己の言説——あるいは客観的事実を、あるいは自己の判断・志向・感懐等々を、ある程度の自信をもって相手に告知する気持を表わすのである。ただしその相手方は、事実親しい間柄にあるか、そうでなければ親しい間柄であると自分勝手に決めても不自然でない場合でなくてはならない。身分の上下は問わない。ここで、湯沢博士の「打解けた間柄に用いる語であって」というのに異論はないが、「目上の者との談話に現われることはない」というのは、事実に戻さないだろうか。例はいくらでもあるが、江戸資料で「ゼエ」初発の頃の『甲斐新話』（前出）で、金七が谷粒にむかって「ゼエ」を用いる。両者の身分関係は明示されていないけれども、金七は谷粒にむかって「ごせんす」調で話し、谷粒は金七にむかって「だ」調で話しているのだから、谷粒が目上でないとはいえない。あるいは『呼子鳥』（安永八年刊）や『南客先生文集』（安永年中刊）で、駕かきが客にむかって「ゼエ」を使っているし、あるいは『船頭深話』（文化四年刊）でも、二十五六歳の青年伝吉が四十歳の徳兵衛に対して「ゼ」を使い、船頭が客へ、女郎が客へ、みな「ゼ」を使っている。そしてそれらの連中はみな敬体で話しかけるのに、相手は常体で応じている。これらの相手が目上でないとはいわれまい。江戸にその例が多々あるように、あ

るいは仲居が客に「ぜ」を使い、あるいは花車が客に「ぜえ」を使った例が見えている。幕末でもめずらしくなく、

・モ今頃は夜店も出しかけておりますぜ。(下女↓嬢さん)

—穴さがし心の内そと・初編—
 ・ア、又宿の親父呼にやりますぜ。(丁稚↓番頭)

—同右・二編—
 ・二本で六四になった、大分下^{くだ}つたぜ。(女房↓亭主)

—同右・三編—

要するに「ぜ」系列に應ずる待遇感情は、親愛に定着するのではなくて、親から狎までの間を揺れ動くのである。従つて目上に対してこれを用いると、目上はこれを親ととらないで狎ととる場合も生じる。『方言と大阪』の著者が「下級な」といい、『大阪方言事典』の著者が「下品な」といったのは、そういう場合の「ぜ」に対する評価に外ならない。(もつとも目上・目下の関係でなくとも、言手が独り勝手に相手を「ぜ」あしらいする場合でも、同様の結果は起こりうる。)

それはともあれ、「ぞえ」は、もともと終助詞「ぞ」に終助詞「え」の付いたものでありながら、複合してしまえば——まして形態まで変わって「ぜえ」以下となつてしまえば、もう体言には付かない。つまり「ぞ」よりも用域が狭くなる。また、「ぞえ」も「ぜえ」以下も、文末の活用語終止形に付くといつても、その文が疑問文(文中に疑問語を含む文)であれば付かない。

・小かつとはどんなものぞ。 —安永年中刊・風流株人形・上—
 ・何んじゃぞい。 —天明六年刊・短華葉集—

・おつやさんわたしがつゝみはどこにあるぞいな。 —宝曆六年以前刊・月花余情—

・とよ、なぞ奥へやりましやらんぞいの。 —同右—

この点も「ぞ」との相異点であり、「ぞい」「ぞいな」「ぞいの」との相異点でもある。

※俚諺に「大阪さかいに京どすえ、兵庫神戸の何ぞいや」といい、神戸方言には今なお「ぞい」が残っている。

「ぞえ」「ぜえ」以下と接続を同じうするのは、「ぞや」「ぞよ」である。

・はおなつどん、花情さんのおいなはったぞや。 —前出・月花余情—

・其時の戻りには玉正^{たままこと}か大寅^{おほとら}でどつさりとお布施をおこるぞ。 —前出・穴さがし心の内そと・初編—

ヨ。 —前出・穴さがし心の内そと・初編—

しかしこれは必ず同輩以下に用い、決して目上に用いることがない。そこが相異点である。次に、「ぞえ」には他の助詞が添わないうが、「ぜえ」以下には「なあ」「のう」(共に終)に限り、付く。この「なあ」「のう」は、相手の共鳴を求めめる意を表わすものだが、必ずこのように長呼される。短呼の「な」「の」は付かない。

・呑^のでもまたあのくれへとほつた子はねへぞのう。 —天保四年刊・春色辰巳園・初編二—

・大失敗をしたぜなア。 —天保十年刊・梅の春・二編一—

この点が「ぞえ」と「ぜえ」以下との相異点である。両者は単に形態を異にするだけでないといえる。(右の文例は江戸のものだ)

さてこの終助詞は、江戸・上方ともに、近世においては男女共

用であった。江戸側に「ぜえ」の形が廃滅したのは弘化・嘉永以降ではなかったろうか。また上方では「ぜえ」の形はついに栄えることなしに寛政以降にその気配を見せただけで、専ら「ぜ」のみに終始したのではないか。乏しい資料からではあるが、そう思われる。明治以降に入ると、東京では女性はいなくななり、その男性専用さえもが時間と共に衰退して行く。これに反して京阪では、一部の人に下級とか下品とか評価されつつも、依然として男女共用、「ぜ」は「で」と更新して勢力を保持しつづけている。そしてこれが「で」となったばかりに、さしあたり上方落語——繰返しているが、その言語は古色を存しているために、上方弁の現状に通じない読者乃至聞き手に、ある種の困惑を感じさせる場合が生じているのではないかと杞憂される。というのは、理由を表わす接続助詞に「で」（ので、からの意）があり、これがしきりに上方落語に、紛らわしく登場するからである。

例えば、桂春団治の『按七』（前掲）には、「で」（但し格助詞・助動詞を除く）が総計27個現われる。前掲の表に筆者が終助詞「で」13個として示したのは、左の通りである。

- 1 清やん、五十銭も、とても出来へんで。
- 2 彼奴らやつたら、抜き兼ねよらへんで。
- 3 貴女は判つてますで、何んでもおまへんやろけど、中々、私にはむつかしうて覚えられまへんで。
- 4 清やん、七兵衛、居よらへんで。
- 5 何んや、赤い顔して、何んや掴んどるで。
- 6 清やん、七兵衛が、何んや筆を頂いとるで。

文末にあるからとて油断はならない。現に3、7、12の「で」など、接続助詞と解する人がないとは言いつてもいい。勿論テキストは大衆読物であり、筆録者また学術論文のような厳格さをもつて句読点を打っている訳でないから、無条件にそれに頼ることはできない。まして接続助詞が文末に来てもすると、句読点の有無など、てんで問題にならない。筆者が接続助詞と認定したのは、次の通りである。

- 13 お前かて、また、どんな事で遅が向いて来るや判らへんで、悲観せいでもええ。
- 14 あの七兵衛、藪さうにしてけつかるで、こゝで赤恥を掻してやるさかい。
- 15 これやで、教育の無い人と交際するのは厭やと思ひますで、ハ、ハ、ハ。
- 16 いま、こゝに持ってをらんで、書いたら、宅で取つて来てやる。
- 17 ヨシ、それでは、これから宅へ帰つて取つて来るで、そ

れまで、こゝを動かぬ。

18 オイ、コラ、七兵衛や、二人が銭を取りに帰んで来るで、それ迄、こゝを一寸も、動いたら承知せんぞ。

19 ソレ見なされ、私等、いつも此の通り銭は紙幣でも銀貨でも持ってますで、男と云ふ者は、表へ出たら七人の敵があるとか云ひますでなア。

20 七兵衛、直き戻って来るで、待つとれ。

21 あの人は、中々の学者ぢや、恰度、少々のお金も貸してあるで、えゝとこへ、気がついた。

22 決して捨て置く様な事はしまへんで、どうぞ、もう二三日お待ち下さりますやう。

23 ツイ、近所に私の兄が居りますで、それでよろしかったら呼んで参りませうか。

24 御覧じ遊ばせや。火鉢の灰の中へ書きますで。

25 貴女は判ってますで、何んでもおまへんやろけど、中々、私にはむつかしうて覚えられまへんで。

文中にあって、下に「ゝ」があるからとて安心はできない。例えば14、19、20、21、22、24など、終助詞と解する人がないとは限らない。中でも24のごとき、文末である。これを終助詞のそれと解しても、それはそれで文意は落着を得るのである。もともと江戸でも上方でも、明治以降では、「ぜ」「で」の下に「なあ」「のう」を伴なうことはなくなつたから、19の後例などは、それを目安にして判定することもできないではない。しかしそれにしても紛らわしい例でないとは言ひ切れない。

接続助詞「で」が、常に必ず文中に用いられるのであれば、何の困惑することもない。しかしこれはまたそこで文を終止することもあるのだから、ややこしくなる。それも実演、口頭語であるならば、イントネーションなど判別の手がかりがない訳でもない。しかし印刷されて全国の人を読者に迎えるとなると、前後の文脈も、接続法（終助詞・接続助詞ともに同じ）もオールマイティでなくなる。そこへ持って来て、格助詞の「で」、助動詞「だ」の連用形「で」、これがまたしばしばそこで文を終止することがある。それだけにこれらのすべてを解明し尽くして置くことは、上方の場合、特に喫緊事である。

〔付記〕

寛政以降、上方の「ぜえ」の例

・申小糸さんたばこ入が出来て来たぜへ。(こめろ↓女郎)

——南遊記・二——

・今せねばする時はないぜエ。(花車↓芸子) ——文政五年刊・

河東方言箱まくら・中——

・わしや入口にまつてい。ぜエ(客↓女郎) ——文久

年中カ・ことわざぐさ躰の宿替・四——

すなわちこれらの「ぜえ」は、「ぜ」の長呼でも、まして「ぜ」に「え」(終助詞)の添うたものでもなく、まったく「ぜ」の一つ前の形であるということ、そしてまたこの「ぜえ」なり「ぜ」なりは、相伴なつて江戸から西漸したものであろうというのが筆者の見解である。

——大阪学芸大学教授——